

## エチュード

ほの暗い客間に独り座り  
湧き上がる追憶から焦燥が降り積る

触れる程のすぐ傍をゆっくりと羽搏き

紫の蝶はハイビスカスに留まろうと目の前を過ぎる

エチュードに紅茶を注ぎ  
立ち昇る湯気にレモンの香りが身を預ける

貝殻を拾い、波の中のオレンジをすくい  
御前が愛していたものは私ではなく

この曲に託す感情などはなく  
ただ上品に、典雅に、愛らしく、と奏く

さらさらと砂は流れ落ちてゆき  
どうしようがあったらう、自由に対して・・・

中断の後の静寂を避けるために  
最後の余韻をこの部屋に満たすために

(1985.5.6)